

生涯美術社会との接点を意図した美術科教育の展開

竹内 晋平

〔抄録〕

本邦で行われた調査によると、スポーツや音楽と比較して成人の日常生活に美術の存在が希薄となる傾向を読み取ることができる。この結果は、社会に対する美術科教育の意義を考えさせられるものであると言える。本研究は、美術科教育において生涯美術の素地として育てておくべきファクターについて検討するとともに、授業実践を通して児童が体得できた感覚を明らかにすることを目的としている。

現職教員を対象とした図画工作科に関する教職的資質についての質問紙調査の結果からは作品の完成度を高める指導の必要性を求める声が増えつつある。しかし、本稿においては“絵の上手なえがき方”の指導ではなく、“絵をえがく時の感覚”を体得できる指導を重視するという立場をとった。このような考えに基づいた水墨表現を取り入れた図画工作科授業実践を行った。ゲストティーチャーによる授業場面の発話記録を分析したところ、6年生児童は「感覚の意識化」「感覚の把握」「感覚の体得」という3つの段階を経て、生涯美術の素地としての感覚を体得する傾向があることが明らかとなった。

キーワード：生涯美術，美術科教育，水墨表現，感覚

1. はじめに

内閣府が15歳以上を対象として行った世論調査(2005)¹⁾や成人を対象として行った世論調査(2003)²⁾は、スポーツや音楽と比較して成人の日常生活に美術の存在が希薄となる傾向を示していると言える。これらの内閣府調査によると、1年間に経験した生涯学習の内容は、「健康・スポーツ」の頻度が高く、「音楽・美術」を上回っている。また、1年間に直接鑑賞したことがあるものとして頻度が高いのは、「映画」、「音楽」、そして「美術」の順であることを示している。このような結果からは、義務教育終了後の生活においては芸術以上にスポーツの存在が大きいこと、芸術に関しては、多くの成人の関心は映画・音楽に向いている傾向を読み取ることができる。美術への関心が比較的高くない要因として、多くの人が“美術は敷居が高く感じられる”“美術は専門家のもの”といった見方をもっていると考えられると同時に、社会

に対して美術科教育や教員が担うべき役割についての議論の必要性を感じさせるものでもあると言える。

このような背景から、以下の2点を目的として本研究を推進することとした。

- ・生涯美術を見通した場合、美術科教育において素地として育てておくべきファクターについて検討する。
- ・上記の検討に基づいた授業実践を行い、体得できた感覚を明らかにする。

研究方法としては、第2章で生涯美術社会の形成と美術科教育との関係について、筆者によるこれまでの研究成果、および教育と社会との関連についての知見をもとにして予備的に考察する。次に第3章においては美術科教育における現状を踏まえた上で、児童生徒が習得することが望ましい感覚について論じる。そして第4章では、生涯美術の素地を形成するための図画工作科授業の試みについて言及することとする。

2. 生涯美術社会と美術科教育との関係

筆者による前研究「日本におけるアートマネジメントの現代的諸相－「空間」と「時間」の共有を視点とした公共性の検討－」³⁾においては、美術が社会浸透するためのモデルの検討を行った。(図1)はこのモデル図を再掲したものである⁴⁾。

2次元平面の縦軸は、市民がアート共有する際の「空間」における関わりを、横軸は「時間」における関わりをそれぞれ表している。美術館等で従来に行われてきたアートマネジメントを第3象限に配置し、相対的に得られた各領域の属性を以下に示す。

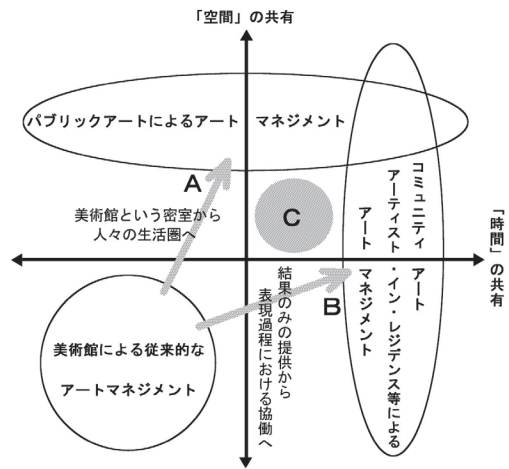


図1 「空間」と「時間」の共有を視点としたアートの公共性

- A 「美術館による従来的なアートマネジメント」は「空間」としては閉鎖的である。アートを展示する「場」は、次第に市民の生活圏へと広がっていった。
- B 市民の生活圏へとアートを広げても結果としての作品を提供するだけでは、アートが市民のものとはならない。したがって、表現過程という「時間」を共有することがアーティストからも市民からも求められることとなった。
- C A・Bの両者が重なる領域は、公共性の高いアートマネジメントが期待できる。しかし、Cの領域はアーティストからも市民からも意外に見過ぎされており、小規模

な地域、限定的な期間であるからこそ保障できる公共性があると考えられる。

本研究においては、とりわけ「Cの領域」に着目し、公教育における美術科教育を視点とした生涯美術社会形成への方策を模索していきたいと考える。これまでの学校と地域社会での教育連携については、「学社連携論」として1970年代頃より始まった。学校教育と社会教育が補完的な関わりをもつというものであったが、さらにその後は「学社融合論」として発展的な議論がなされるようになった。伊藤俊夫(2000)は、「学社融合論」に関連して「教育を学校に依存するだけでなく、子どもたちの人間づくりの機会を再編成する必要がある。再編成は、従前のような学校教育対社会教育という二極対立的な姿勢ではなくて、あらゆる教育が一体化され、新たなものを創出する働きでなければならない」⁵⁾と述べている。この論調からは、子ども人間形成を考えた上で社会教育としてどのような関わりができるのか、あるいは、学校をとりまく存在として社会教育施設にどのような貢献ができるのかという点に特化した「学社連携論」であることを読み取ることができる。

2008年になると、中央教育審議会・答申⁶⁾において「生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむことなどを重視する」という指摘がなされた。この方針からは、児童・生徒が義務教育終了後に芸術との関わりを持ち続ける生涯美術社会を具現するための基礎的な資質を義務教育段階で育もうとする意図を読み取ることができる。つまり、義務教育終了後の生涯美術を見通した美術科教育を推進することによって、美術の社会浸透を図るという考え方である。

しかし、中央教育審議会・答申では、義務教育段階の児童生徒が成人した際に垂直方向に対して役立つ効果のみに限定した言及となっている。一方で筆者が前掲(図1)における「Cの領域」で模索するのは、“児童生徒から家庭や地域社会への学習成果の発信”をも含んでいる。つまり、義務教育での美術科教育を中心として、その学習成果が他者に対して水平方向にも広がることを期待するという概念である。このように美術科教育の学習成果を効果的に発信するためには、情報発信するための“場”である空間と時間が保障されること以前に、以下のような素地を美術科教育(学校教育)の中で育成することが必要であると考えられる。

- ・美術科教育が“作品づくり”によって完結するものではなく、児童生徒が美しさや楽しさについての感覚を体得すること。
- ・教え込みや訓練ではなく、美的経験を伴っていること。

次章においては、これら2つの条件を満たす上で必要となる美術科教育における「美的経験を通した感覚」に関して詳述することとする。

3. 美術科教育で育む「美的経験を通した感覚」

時として教員は“学習行為を成立させること”を教科教育の主目的としている場面はないだ

ろうか。つまり、“授業において児童が練習問題を解く”、あるいは“児童同士での話し合い活動を行う”等の学習行為を展開することが先行しており、それを成立させることが指導のねらいとなっている事例もあるのではないかとこの憂慮である。本来、教育活動においては育てるべき児童の資質・能力を教員が予め設定

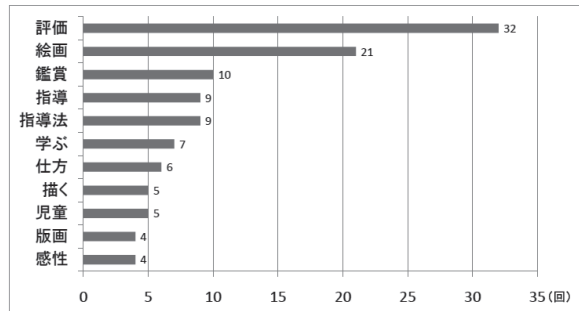


図2 現職教員対象の質問紙調査におけるキーワードの出現頻度

し、これに応じた学習行為を決定していくことが必要であると考えられる。前述の“学習行為の成立させること”が先行する場面は、美術科教育において“作品主義”という形となって表れる⁷⁾。現職教員を対象とした図画工作科学習指導に関する問題意識についての質問紙調査を行ったところ、グラフ（図2）に示す傾向が現れた。このグラフは、同調査における現職教員の自由記述に出現したキーワードの頻度を示したものである⁸⁾。具体的に「評価」、「指導」、「絵画」等のキーワードが頻出していることから、図画工作科において必要となる教職的資質として現職教員は、“作品評価法”、“作品指導法”に関するものを求めている傾向があることが示唆された。この結果が直接的に“作品主義”につながるとは言えないが、「指導」と「評価」によって、学習行為（あるいは教授行為）が成立することに意識を向けがちな現職教員の実情をうかがうことができる。同様の傾向としては教員免許状更新講習の際に行われた調査として、以下のような指摘がある。

「結果的には、これらの教師の図画工作教育においては、上手く上手に作品を作り描くこと。それを目指して児童に教えなければならないという図画工作の教育観・評価観が存在してしまうことになる。それを裏付けるかのように、「どういう指導をすれば良いのか、どうすれば上手にできるのか、わからないまま指導しているから」と苦手意識のある理由を書いている教師もいた。ここに、無意識の内に上手な作品作りを目指している教師の教育観が反映されてしまっている。」⁹⁾

この記述には、教師の教育観が児童作品の完成度に限定した“作品主義”に偏る傾向が色濃く現れている。このような現象が図画工作科教育の現状であるとすれば、美術科教育を児童の生涯美術を見通した教育活動に結びつけることが困難であると言えよう。

一方で、平成20年に告示された小学校学習指導要領における図画工作科の目標には、「感性を働かせながら」という言葉が新たに追加されている。この目標を受けるように、「各学年の目標及び内容」では「つくりだす喜びを味わう」、「面白さや楽しさを感じ取る」、「よさや美しさを感じ取る」という記述がなされた¹⁰⁾。また、これらを具現化するために〔共通事項〕として、「自分の感覚や活動を通して」、「自分のイメージをもつ」等の事項が示されている¹¹⁾。

このような「味わう」、「感じ取る」、「イメージ」という語が示している感覚は、図画工作科において児童がどのような経験をするのが重要であると考えられる。作品の完成度を高める指導によってではなく、美的経験を意識化するための指導が必要ではないだろうか。つまり、描画指導の場合は“絵の上手なえがき方”を指導するのではなく、“絵をえがく時の感覚”を意識させる指導を行うことが重要であり、鑑賞指導では“作品の見方”ではなく、“作品を見る時の感覚”を視点とした指導が必要だと考えられる。次章においては美的経験の意識化を視点とし、水墨表現の題材化による授業実践の試行について提示することとする。

4. 水墨表現を扱った図画工作科授業の実践と考察

水墨表現は墨の濃淡、かすれ、にじみ等の技法を中心とした描き方であり、鎌倉時代に中国より禅宗とともに日本にもたらされ、室町時代には人物画・花鳥画だけでなく山水画が盛んに描かれるようになった。水墨画の多くは有彩色を使用しないため、表現の幅が広がりにくいととらえられがちである。本章で扱う授業実践においては、児童が黒と白との濃淡によって様々な階調を表したり、淡墨がもつ微妙な灰蒼色を味わったりすること、そしてゲストティーチャー（以下、「GT」と記述）の実演にふれることを通して、児童が「美的経験を通じた感覚」を体得することをねらいとしている。

(1) 授業実践「黒と白とで あざやかに」(京都市内 A 小学校・6 年生、2011 年 10 月)

①実践の手続き

水墨画ならではの表現としては、没骨法が特徴的であり、他の描画材（鉛筆、クレヨン等）にはない表現を生み出すことができる。この没骨法を試みるには、①調墨、②筆使い、の2点を習得する必要がある。①は、淡墨・中墨・濃墨を皿の上で調節した上で、筆の穂先から根本にかけて濃さの違う墨を整えながら含ませることである。②は調墨した筆を立てたまま描く方法（直筆）と、筆の腹の部分を使うために傾けながら描く方法（側筆）とを使い分けることである。全体の学習計画を次頁（表1）に示す。

1 回目の表現活動・「問題の把握」では明治期に使用されていた毛筆画手本¹²⁾を臨本として臨写を行う。臨写は戦前の図画教育において技能指導をねらいとして盛んに行われたが、戦後の学校教育においては、ほとんど行われていない¹³⁾。個性に基づいた表現が困難にも見える臨写を学習活動に取り入れたのは、児童が水墨画に関する課題把握を行うことを意図したためである。つまり、児童が臨写を経験することによって、他の描画材とは全く異なる表現方法が必要であること、墨の濃淡に留意しなければならないことに気づくと考えられる。

2 回目の表現活動・「問題の追究」では、上記のような課題把握を経て、日本画家である GT に没骨法の基礎を教えて頂きながら、「自分にも表現に濃淡を生かした水墨画を描くことがで

きた」という課題解決につなげることを意図している。

表1 図画工作科学習「黒と白とで あざやかに」（6年生）学習計画

学習過程	学習活動	指導上の留意点
問題との出会い (1時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・明治時代に臨本として使用された水墨画を鑑賞し、どのようにして描かれているのかについて話し合う。 ・特徴的な技法に着目して鑑賞する。 ・自分が描いてみたい臨本を選ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめは明確な視点を設けずに鑑賞し、徐々に「描き方」を学習課題に中心とするようにする。
問題の把握 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・選んだ臨本を「写す」ことに挑戦する。 ・描いてみてうまくいかない表現ややり方がわからない表現について話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的な技法指導は行わず、児童が問題の所在を自分で確かめ、次時に生かせるようにする。
問題の追究 (2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に把握した問題について振り返る。 ・日本画の先生から技法についてのお話を聞き、実演を見る。 ・線描法、没骨法、たらしこみ等の練習を試行的に行ってから、「写す」活動を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1人の児童があまり多くの技法にまたがらず、1～2の技法に焦点を当てて行うようにする。
問題の解決 (4時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に「写す」ことで表現した体験もとに自分なりの作品を表現する。 (「模様づくり」「見てえがく」のうち好きな方を選んで表現する) 	<ul style="list-style-type: none"> ・表現する過程に得られた感覚、感じた面白さなどを意識化するために話し合いの場を設ける。

② 実践の経過

(表1) に示した学習過程のうち「問題の追究」の段階においてGTによる指導を行った(5種類の毛筆画手本に対して5名のGTが参加し、手本の種類ごとに実演を行うこととなった)。GTによる臨写の実演を交えた指導は、水墨画を描くための技術を指導すると同時に「日本画の専門家もつ感覚」を伝えることを重視したものであった。以下に1つの毛筆画手本(図3)の臨写を指導した事例を示すこととする。

前項で述べた水墨表現に必要な調墨や筆使い等に加えて、GTによって水分の調節や筆を動かす早さ、リズム等の指導がなされた。その後、児童は車座になりGTを囲むようにして臨写の実演を見学した。

(表2) に示しているのは、毛筆画手本の臨写実演のうち、「松葉」の描き方を指導する際にビデオ収録された画像・音声記録をもとにして、GTと児童の発話を書き起こしたものである。



図3 毛筆画手本(画題:「松茸・松葉・紅葉」、部分)

前掲の毛筆画手本に描かれた松葉の臨写方法を指導する際、GTは調墨や筆使いに必要な感覚を上記書き起こしの下線部分に示すようなオノマトペを多用して表現していることがわか

表2 毛筆画手本の臨写実演における発話記録

GT :	さあ、あと松葉。松葉もこれ薄いから、(筆先を)思いっきり絞り込んで…、(筆の)先を <u>ペチャッ</u> とそろえて…。
C :	先をペチャッと(復唱する)…。
GT :	松葉っていうのは、構造的にいうと、これ2本ずつくっついてるのわかる? 知ってる松葉? 松の葉っぱ。松、生えてるやん。あの松の葉っぱ。ここに根元がこうあって、ここでくっついてるねん。そこから2本の緑の針みたいなのが、 <u>ピュッ</u> 、 <u>ピュッ</u> と出ている…
	[中 略]
GT :	(松葉は)1セット。ここで緊張して(筆の)先だけを <u>チュッ</u> と当てるぐらい。ここに小指を置いて…、 <u>シュッ</u> 、 <u>シュッ</u> …。
C :	(笑い声)
GT :	<u>シュッ</u> 、 <u>シュッ</u> …、 <u>チッチッチ</u> 。
C :	チッチッチ(笑いながら復唱する)。(さらにGTの筆使いを自分の手で真似る)

※ 中略および()に示した注記は筆者による

る。しかも「ペチャッ」、「ピュッ」、「シュッ」、「チッチッチ」等は、全てGTの手先の動きに連動して発声されたものであるため、児童は水墨画を描く際に必要となる感覚を理解しやすかったと考えられる。

さらに特筆すべきは、(表2)の書き起こしにも記載されているが、実演を見学している児童がGTの発話を復唱したり手真似をしたりしながら、見て学んだことを確認の様子が観察されたことである。このような点からも、専門的な用語を使用することではなく、GTが選んだ上記のような指導方法は小学校6年生という発達段階に適していたと言える。

(2) 「美的経験を通じた感覚」を視点とした考察

従前の表現指導においては完成した作品をもとにして、児童の自発的な工夫を促すような形態が多く見られた。このような方法での図画工作科指導にも一定の成果があり、筆者はこれを否定するものではない。しかし、“感覚を伝える”という点では積極的な指導とは言えないのではないだろうか。

前節に示した発話記録からは、単なる技術指導ではなく“絵をえがく時の感覚”や“絵をえがく楽しさ”までを伝えようとするGTの意図から、オノマトペが活用されていたことを読み取ることができる。このような伝え方をすることで筆を運ぶ際の微妙な力の入れ具合や筆を動かすスピード・リズムまでを表現できていることが感じられた。興味深いことに、臨写実演を見学した後の児童は、同じようなオノマトペを発話しながら自分自身の臨写を試みる姿が見られた。実演の見学から児童の表現までを「美的経験を通じた感覚」を体得するプロセスととらえると、以下のような3段階として示すことができる。

① 「感覚の意識化」： オノマトペを伴った臨写実演を見学する

② 「感覚の把握」：オノマトペの復唱や手真似によってシミュレーションを行う

③ 「感覚の体得」：オノマトペを伴った表現を試行する

本研究における授業実践では、このようにオノマトペが軸となり、日本画の専門家がもつ感覚が技術とともに児童に伝えられていく場面を確認することができた。今後の課題としては、美術関係の専門家だけでなく、このような「美的経験を通した感覚」を小学校教員が教職的資質として体得することである。特に授業実践で顕著な効果を確認することができたオノマトペを活用する方法は、他者への伝達性や再現性が高いと考えられるため、今後の教員養成の場においても注目されるべきであろう。

5. おわりに

前章でふれた授業実践においては、児童が日本画の専門家がもつ感覚を体得するプロセスを記録することができた。この感覚が児童の中で確立していくためには積み重ねの学習を今後も続けていくことが必要である。このような「美的経験を通した感覚」を重視した指導は“作品づくり”によって完結する美術科教育と比較して、生涯美術を垂直方向に見通す上で重要なファクターとなっていくと考えられる。

今後の課題としては、教員養成課程の中でこのような「感覚」を教授していく方法の確立が必要である点あげられる。また、美術科教育が生涯美術社会との接点を意識した場合には、「感覚」をどのようにして水平方向に広げていくのかという点を明確にすることも求められる。美術科教育において児童が体得した感覚を家庭・地域に対して伝達するための方策については、別稿¹⁴⁾で述べることにしたい。

〔註〕

- 1) 内閣府ホームページ、「生涯学習に関する世論調査」(2005.8.1更新),『世論調査 (インデックス)』(平成17年度 世論調査), (<http://www8.cao.go.jp/survey/h17/h17-gakushu/index.html>), 2011.8.20取得
- 2) 内閣府ホームページ、「文化に関する世論調査」(2004.1.26更新),『世論調査 (インデックス)』(平成15年度 世論調査), (<http://www8.cao.go.jp/survey/h15/h15-bunka/index.html>), 2011.8.20取得
- 3) 竹内晋平「日本におけるアートマネジメントの現代的諸相－「空間」と「時間」の共有を視点とした公共性の検討－」,『教育学部論集』, 第22号, 佛教大学教育学部, 2011, pp.97-106
- 4) 前掲論文, P.103
- 5) 伊藤俊夫「学社融合への道」, 伊藤俊夫編『学社融合－子どもたちを地域ぐるみで育てる－』, 全日本社会教育連合会, 2000, p.15
- 6) 文部科学省ホームページ,「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」(2008.1.17更新), (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/fieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf), 2011.8.20取得
- 7) Takeuchi, Shimpei, “Attitudes toward a Lifelong Study of the Fine Arts” as Professionalism of Teachers: Support for Teacher Education through the Development of Educational Resources. *The*

2nd East Asian International Conference on Teacher Education Research, Abstract, 2010, p.93

- 8) 図画工作科指導における教職的資質に関する質問紙調査の概要
- 調査の対象 : 京都府公立小学校教員 (75名)
回答方法 : 自由記述
有効回答数 : 57名
実施日時 : 2010年8月23日
キーワードの抽出方法
: テキストマイニングソフト (IBM SPSS Text Analytics for Surveys Japanese 4.0) により出現頻度が4以上のキーワードを自由記述から抽出。ただし、図画工作科指導とは直接関係のないと判断される「思う」「いつも」等のキーワードは除外した。
- 9) 降旗孝『『小学校・図画工作を指導している教師の意識と実態』:山形県・教員免許状更新講習から』、『山形大学紀要 教育科学』, 山形大学, 第15号 (2), 2011, p.198
- 10) 文部科学省『小学校学習指導要領』, 2008, pp.83-87
- 11) 同上
- 12) 京都市立芸術大学が所蔵する毛筆画手本 (制作年不詳・5種類) をスキャナーで読み取り, カラープリンターにより電子的に複製 (実物大) したものを児童に提供した。
- 13) 石川誠「絵手本『北斎漫画』と臨画教育」, 『大学美術教育学会誌』, 第38号, 大学美術教育学会, 2005, p.20
- 14) 竹内晋平「造形活動における児童の感受を通じた芸術発信 I」, 『大学美術教育学会誌』, 第43号, 大学美術教育学会, 2012 (印刷中)

[付記]

- ・研究方法についてご指導をいただきました横田学先生 (京都市立芸術大学)、本研究で扱った授業実践においてご指導いただきましたゲストティーチャーの小池一範先生 (京都市立芸術大学)、川嶋渉先生 (京都市立芸術大学)、京都市立大学美術研究科大学院生の皆様に心より御礼申し上げます。そして授業実践の場をご提供いただきました京都府内 A 小学校の先生方、児童の皆様に感謝の意を表します。
- ・本稿は、日本教育実践学会 第14回研究大会 (2011年11月5日、於:佛教大学) における口頭発表「生涯学習社会を見通した美術科教育の新たな展開」の予稿に基づいている。
- ・本研究は、下記の研究助成を受けている。
2011年度科学研究費 若手研究 (B)、課題番号 (23730847)、研究課題名「美術科教育と生涯美術社会との接続に関する社会実験研究」

(たけうち しんぺい 教育学科)

2011年10月31日受理

